

アウグスチヌスの愛の思想における 『友と共なる生活』について

和田トク子

アウグスチヌスの愛の思想について、彼の著作を詳しく検討し、相当鋭くこれを分析した人として、スウェーデンの神学者、アンダース・ニーグレンが挙げられるであろう。彼は、愛の問題こそ、キリスト教の中心であるにも拘らず、従来、この愛の観念の理論付けが、とかく等閑に付され、意義が曖昧にされていたことに意を留め、これをできる限り正確に分析し、その純粋性を取り戻そうとした。彼は、その著『アガペーとエロース』において、人間における二つの愛の問題を取り上げ、これらの本質の分析、及び両者の対比、並びにその歴史的過程を徹底的に追求しているが、紙面の都合上、こゝではそれを省略する。ただ、特記しておきたいことは、アガペーとエロースという二つの愛の観念が、絶対に相容れないものであるにも拘らず、これらが中世に至って、すっかり混り合ってしまった、特にアウグスチヌスによって、一見、アガペーでもエロースでもなく、両者の出会いによる、第三の愛カリタスが生み出された、と彼が考えたこと、更に、このカリタスなるものが、果して両者の統合であり、新しい愛の観念であったかどうか、その正体を見究めようとの意図から、彼がアウグスチヌスの愛の思想に大いなる関心を抱き、これを詳細且つ鋭く分析していったことで、これは、アウグスチヌスの愛の思想を研究していく上にも、大いに助けとなり、彼の思想を、よりよく理解するよすがともなるのではないかと思う。

ところで、ニーグレンは、遂に、彼特有の鋭い分析によって、アウグスチヌスの愛の統合が、実は見かけだけのものであって、それは本質的にエロースに基いており、アガペーと共通なるものは殆んどもっていないという結論を下すに至った。たしかに、アウグスチヌスの愛の思想には、ニーグレンが主張する如く、プラトンの上昇の道を辿っている面が認められる。しかし、こゝでアウグスチヌスの愛を、はじめから、アガペーかそれともエロースか、という尺度で追求してい

くニーグレンのアプローチから一先ず離れ、アウグスチヌスのアモール乃至カリタスと云われる愛自体を、著作『告白』に沿い、初期の著作『ソリロキア』も若干参考にしたが、彼の説く愛の特徴、愛の神髄が、どこにあるかを考察していきたいと思う。但し、注意しなければならないことは、アウグスチヌスにとって重要な問題は、愛の本質を、いかに正確に理論付けるかということではなく、*amare* 愛するということが、人間にとって根本的事実であり、そして、それ故にこそ、彼自身、その一生を通してこの愛に生き抜き、その思想を生み出したということである。

さて、愛が人間にとって根本的事実であるということは、具体的にいかなることなのであろうか。『告白』第10巻⁽¹⁾で、彼は、先ず *beata vita* 至福の生を求めている自分を視つめ、それが自分一人でも、自分と他の少数者のみでもなく、まさに全ての人間がそれを願っており、全く欲しないような者は誰一人いないという事実に目をとめる。では、人々はそのことを一体どこから知ったのか、自分の至福の生を想い出し、愛し、熱望するのは、どこでいつ経験したからなのかを考え、そして、どのようにしてか解らないが、とにかく所有していることは事実であるとの確信を抱くに至る。というのも、それを何らかの仕方⁽²⁾で所有しているのでなければ、至福でありたいと願うことすらないからである。従って、こゝで云われている根本的事実としての愛とは、至福への愛や熱望、換言すれば、*velle gaudere* のことである⁽³⁾。更に、彼が重要視していることは、*velle gaudere* に基をおく愛が、たゞ求めるだけの一方的愛ではなく、「愛し愛される」という相互性に基くものなることである。しかも、彼にとってこの相互性とは、単に抽象的、概念的に考察されたものではなく、現実の「友と共なる生活」、つまり、*societas amicorum* を意味しており、こゝにこそ、真の愛が成り立つということが、彼の終始一貫強調するところである。アウグスチヌスの『告白』には、それが非常に詳しく描写されているので、以下、そこに描かれている彼の生涯を辿りながら、友と共なる生活が、彼にとって、それなしには生きていけなかったほど重要な位置を占めていたのは何故か、又、この友愛が、彼の魂の成長に伴って、いかに発展し且つ深まっていったかを見ていこう。

『告白』最初の巻には、彼が幼年時代を振り返り、すでに、そこにも悪い遊び

仲間としてではあったが、それはそれなりの親しい友との交わりの喜びを経験していたことが述べられている。⁽³¹⁾たとえば、親の許から屢々食物を盗んだりしたのも、食欲にそゝのかされた、というよりは、むしろ、盗んできた食物を友だちの玩具とひきかえに、その友に与えるために外ならなかったので、このように、悪事においてさえ、友との交わりの楽しみが、その動機、その目的であった。

しかし、このような友との交わりは、まだ何ととっても漠然としたものであったが、彼自身次第に成熟していくにつれ、「愛する」ことの意識も明白になり、且つ深まっていた。たとえば、16才頃のある時、彼が仲間と共に梨子の実を盗んだことが述べられているが、⁽⁴¹⁾この時も、彼が盗みにおいて愛したのは、仲間との楽しみであった。だから、彼が一人だけであったら、決してそのようなことはしなかった筈で、彼の求めていた快樂は、単なる梨子の実にでもなく、それかといって、単なる盗みの行為にでもなく、実はそれが、仲間と一緒に (consortium simul amicorum)、ということにあったのである。勿論、こういった盗み仲間の友情を、彼は決して善しとしたわけではない。却って、それが非友情的友情 (inimica amicitia)、あるいは、わけのわからない精神の誘惑であったことを、ずっと後で彼は悟るのであった。

情欲にひたっていた青年時代の彼の様子が、第3巻に見られるが、当時の彼を喜ばせたものも、「愛し愛されること」(amare et amari)、たゞそれだけであった。従って、彼はいかなる豊かな肉欲の快樂に溢れていても、友がいなければ幸福ではなかったようである。しかし、このような愛も、友情の範囲に節度を保つことのできない、cupiditasなる愛であって、それは、caritasとは全く反対の「切り立った淵の中に落ちこんでいく cupiditas、情欲の重さ」⁽⁵⁾、に外ならなかったと述懐されている。

彼は、19才から、28才までの9年間、マニ教の教えに心が魅かれ、「様々な情欲のまゝに、その教えに迷わされながら迷わし、だまされながらだます」⁽⁶⁾という人生を送っていたようだが、こゝでも注目に値することは、彼が宗教の虚名のもとに、空しいことに夢中になっていたこの時代にも、多くのマニ教徒の友人たちと、極めて親密で誠実味のある友情を結んでいたことである。第4巻をひもどくと、彼がマニ教の迷信に夢中になっていたこと自体、それが、彼と共に彼に

よって、だまされていた友人たちと一緒に became した、と書かれている。なかんずく、彼はタガステ時代、勉学の仲間として、一人の極めて親しい友を得たが、彼はこの友をも真の信仰から引き離して、マニ教の迷信にひきずり込んでしまった。彼とこの友との友愛の深さは、「今では友は心の中で私と一緒に迷い、私の魂はその人なしには過せなくなってしまった⁽¹⁷⁾」と述べているほどで、それは当時の彼にとって、彼の生活のあらゆる甘美なものに優って、甘美であったようである。この甘美さは、楽しかったかの友との生活から、突然ひき離された時のひどい苦痛、にがさによって、まさしく裏書きされていると云えよう。即ち、この親しい友が、突如この世を去ってしまった時、彼の今までの喜び、甘美さは悉く逆転して、「友の死の悲しみによって、心がすっかり暗くなり、目につくもの一切が死となってしまった。故郷も私にとって責め苦となり、父の家は、わけのわからない不吉なものとなり、友と共有していた全てのものは、彼なき今、おそろしい苦痛と変ってしまった⁽¹⁸⁾」と述べている。それというのも、彼はこの死すべき者を、恰も、死なぬ者のように愛していたため、「友は自分の魂の半分」と云われていたことが、今こそ痛感され、自分の友が死んだのに、自分が生きているということが、一そう不思議に思えたのであった。しかし、彼はこのような激しい感情のうちに結ばれていた友愛を、後に回顧した時、それは「人間を人間らしく愛することを知らない狂気⁽⁹⁾」であった、と云っている。それにしても、当時の彼が、そこにも、友において何か不滅なるものを愛し求めていたのが伺われる。

このような大きな悲しみの中であって、彼の心を柔らげてくれたものがあつたであろうか。幸か不幸か、彼はマニ教徒仲間としての他の友人たちと一緒に became して、マニ教の作り話を愛することで慰められていたのであつた。単にそれのみでなく、そのような慰めを別にしても、彼はこの仲間たちに心がひかれ、彼らと共に楽しい友愛の日々を送っていた。これは、同じく第4巻に美しく描かれている。即ち「共に語り且つ笑い、共に書を読み、冗談を交わし、互いに敬い助け合い、学び且つ教え合う。時として仲違いすることもあるが、それは自分が自分自身に仲違いでもする時のように、憎しみをもたない喧嘩であつて、却つてそれが、多くの意見の一致に味を添えるものとなつた⁽¹¹⁾」と。全く、彼らの生活は、そのあらゆる表現、仕草を通して、愛し愛される心の触れ合いであつた。

「友と共なる生活」が、彼にとってそれほど甘美であったのは何故であろうか。彼はそれを、美の適合性になぞらえ、多くの魂の間に成り立つ一致の美しさの故に (propter unitatem de multis animis)、人々の友情も親愛の絆によって甘美となる⁽¹¹⁾、と考えた。この「一致の美」ということは、愛の深い問題ではなかろうか。彼の表現によれば、仲間の心は、まるで薪にたきつけられたかのように一緒に燃え上り、たゞ一つの魂、となっていたのである。

彼がマニ教に対し、その不合理性故に、次第に疑問を深めていた頃、少くとも、雄弁なマニ教の司教、ファウストゥスには大きな期待をかけていたようだが、彼の無知が暴露されると、全く失望させられてしまった。しかし、それにも拘らず、共に熱心な関心を示していた別の分野、文学の領域で、彼はこのファウストゥスとの交友を始めたのであった。アウグスティヌスは、彼を、身のほどをよくわきまえ、重荷を敢えてひきうけようとせず、自分の知らないことを知り、又、それを告白することを恥としない人で、確かに「心」をもった人であると言って尊敬し、大いに好意を寄せていた⁽¹²⁾。ファウストゥスに見られるこの誠実味こそ、後述する如く、彼が友と共なる生活において、極めて重要視した点でもある。彼は、その他にもマニ教徒の友を多く有していたようで、たとえば、ローマにおいて、彼がカルタゴよりも、もっと良い収入、地位が得られるよう幹旋してくれたのも、マニ教徒の友であり⁽¹³⁾、又、ローマにて、彼が重い病気にかゝった時、ねんごろに介抱してくれた宿の主人も、熱心なマニ教の聴問者であった⁽¹⁴⁾。彼は、これらの人々を心から愛し、異端に属していない外の人々よりも、却って親しい結びつきを有していた。

ミラノにおいて、アウグスティヌスのキリスト教信仰への回心に、大きな影響を与えた人、アンブロシウスを、彼が愛しはじめたのも、真理の教師としてというよりも、むしろ、慈父のように彼を迎えてくれた親切さに心をひかれたからであった⁽¹⁵⁾。このことは、母モニカについても同じく云えることで、彼女がアフリカの教会での習慣を、ミラノの教会で行うことを禁じられた時、もし禁じた者が、アンブロシウスほど愛していない、誰か別の人であったなら、彼女は、おそらく長年愛していた習慣を、あのようにた易く断ち切ることを承知しなかったであろう⁽¹⁶⁾、とアウグスティヌスも云っている。

回心前、すでに彼はミラノにおいて幾人かの親しい友と共に暮していたが、その頃彼らは、一種の組織的な共同生活をする計画を立てていたようであり、その様式は大体次の如くであった。⁽¹⁷⁾ 群衆を離れて閑暇のうちに生活すること、収入、持物を互いに出し合って、共同の財産とし、相互の友情の信義に基き、全てを一つのものとし、且つ、全部が全ての人、一人一人のものであるようにすること、管理者を皆の中から年毎に二名づつ選び、全ての必要事を彼らに任せ、他の者は、一切それに関わらないこと。

以上の計画は、結局実現できなかったようだが、しかしこれをみてもわかるように、彼は、相互の友情の信義 (*sinceritas amicitiae*) を、この共同生活の土台としており、又、この生活の目的達成の必要手段として、閑暇な生活 (*otiose vivere*)、財産の共有 (*res habere commune*)、それに、生活面の事柄の世話 (*omnia necessaria curare*) は、管理者を選んで任せること等が挙げられている。こゝにすでに、後の修道生活、即ち、神への奉仕に己を奉献した者たちの共同生活の基礎的形態が、芽ばえていたように思われる。

回心後、こういった仲間との生活に加わる者も増え、彼らは心をつにして、互いに、今後もその生活を続けていこうとの、聖なる決意を固めていたようである。この仲間のうちには、彼の母モニカも加わっており、彼女は、単にアウグスチヌス個人の母として、彼の傍で暮していたのではなく、もっと積極的な意味で、「神における一つの仲間」 (*in Deo consociati*) として、彼らの共同生活に参加していた。即ち、彼女は、全ての仲間に対し、恰も、生みの母のように世話をし、又、彼女自身が、これら全ての者から生まれた娘でもあるかのように、一同のために奉仕した。⁽¹⁸⁾

この最愛の母を失った時の彼は、「母は、惨めに死んだのでも、完全に死んだのでもないのに、これほどひどい苦痛を起こさせたのはどうしたわけか」と自らに問うた。何故なら、母がこの世の望みを十分果し、全くの幸福のうちに逝くなったこと、又、母が死によって、完全に消滅してしまったのでもないことを、彼はよく知っていたからである。それでも尚、彼の心をひき裂いたもの、それは外でもなく、母と一緒に生活するという、極めて甘美で親愛な習慣から、突然ひきさかれたために生じた傷口であった。彼と母との生活は、'実に彼の生と母の生

とからできていた、「一つの生」と云えるものであった。⁽¹⁹⁾

では、彼は何のために、友と親しい交わり、友と共なる生活を、これほどまで大切にしたのであろうか。かつて、彼が名誉、利得、欲情といった虚妄の喜びを渴望していた時でさえ、その努力の限りをつくして獲得しようと願っていたものは、「安全確実なよろこび」であったと云うが、⁽²⁰⁾このような喜びがいかにして得られるのであろうか、魂とは不死なのであろうか、一体どのように生きていったらよいのであろうか、といった問題を、彼は親しい仲間たちと共に暮し、何回となく話し合い嘆き合っていたのである。これは云いかえれば、広い意味での真理探究とも云えないだろうか。彼自身、これらの仲間の一人、親友ネブリディウスのことを、「ネブリディウスも又、至福の生の極めて熱心な探究者であって、彼は故郷を捨て、までも私と一緒に生活し、真理と知恵の香しい研究を共にするために、ミラノにやってきた云々」⁽²¹⁾とはっきり述べている。又、アウグスチヌスと共にミラノまで来たアリピウスも、極めて強い友情の絆を彼と結んでいたようだが、二人は共に、どのように生きていったらよいのかという問題に悩み、考え合っていたということである。このアリピウスこそは、彼と共にマニ教に入信し、又、共に同心し、共に受洗し、どこまでも彼と共なる道を歩んでいった、彼の長い真理探究の道の伴侶とも云えよう。更に、前述の共同生活計画の意図も、この真理探究にあったことは云うまでもない。

では何故、知恵の探究において、彼は一人だけではなく、友と共に、しかも「多く」の友と共に (cum multi carissimis) 生活することを望んだのであろうか。カンキアムでの真理探究の生活を、『ソリロキア』では、「皆が同時に心を合わせて (simul concorditer)、魂と神とを求めることができるため、それを最初に見出した者は、他の人々をもた易く苦勞なくそこへ導いていくからである」と記され、「私と共にあの美なる御者を憧れ、……共にそれを喜ぶような多くの人々を求めるわけは、その愛を共に分かち合えば合うほど、その人々は私にとって親しい友となるからである」と、友との交わりの親密さが、真理探究においてこそ、深まることを述べている。

しかし、もし友がそのような知恵の探究を望まないならどうであらうか、という問題がこゝで起こってくる。彼は、その場合その者に「それを望むように、友

に先ず勤める。そして、もしそれが不可能であるか、それとも本人が、それを既に見出したとか、見出すことができるか思い込んで、他の事柄に心を配るような場合、そんな友に対しても、自分は、 *habebo eos, et ipsi me, sicut possimus*, つまり、出来る限り友として耐え、同じく彼も私に対してそうあるように望む、と云っている。勿論そこに限度もあり、もしそれが真理探究を妨げるような場合には、そういった友との生活は、むしろ、望ましくないとしている。

たしかに、友と共なる生活は、常にた易いことではなく、そこには必ず問題も起こってくる。それ故、彼は実際の共同生活における極めて肝要な点として、皆とできる限り調和し、相互に信頼し、兄弟の心をもち、互いに荷を負っていく態度などを挙げている。ところで、このような愛は結局、「神において」友を愛することによって、はじめて可能なのではなかろうか。彼は、神における友愛を、次のように説明している。「兄弟たちが、神が愛すべしと教えて下さったものを、私の心のうちに認める時、私を愛し、神が悲しむべしと教えて下さったものを、私の心のうちに認める時、悲しんでくれたなら、どんなによいことであらうか。たゞし、それを異邦人の心ではなく、兄弟の心をもって、やってほしい。実に、そのような心の人は、是とするにせよ、非とするにせよ、とにかく私を愛している」^(12.21)。

「神において」友を愛すること、これは誰にでも可能なことであらうか。「友情が真の友情となるのは、神が与え給うた聖霊によって、私たちの心に愛が注がれ、それでもって、神に依りすがる人々^(12.31)の間の友情を固めて下さる場合に限る」という彼の言葉は、愛の問題の中核に触れており、彼は、この聖霊なる神に向って、「私たちに火をつけて、御許に引き寄せて下さい。そうすれば、私たちは愛し、御許に走りよりましょ^(12.41)う」と祈るのである。全く、愛する、ということは、この聖霊によらなければ不可能なのであり、このことは、第11巻、第13巻等においても繰返し力説されている。しかし、このような愛は、決して、ニーグレンが考えているような、アガペー的「神の愛」でもなく、又、エロース的「神への愛」でもなく、どこまでも、「神において愛する」(in Deo amare)という愛である。それ故、彼は、昔の親友の死の悲しみを想い起し、人間的な友情の何たるかを痛感して、「神なるあなたを愛し、あなたにおいて友を、あなたのために敵

をも愛する人は幸いである。まことに、失われることのない御者において、万人を愛する人だけが、親しい友を一人も失わないで済む。その失われることのない御者とは、われらの神でなくして誰であろう^(12.5)と云っている。

従って、このような「神における友愛」は、決して排他的なものではない。この友愛が広く開かれ、全ての人々にまで拡げられてこそ、はじめて、共同生活における愛の神髄も発揮できることになろう。彼は、「多くの者と一緒に喜ぶ場合には、互いに熱し合い燃やし合うから、個々の者の喜びもそれだけ増す」と説き、その理由を「真理が、真理を愛する全ての人の共有物であって、個人のものではないから^(12.6)」と云う。従って、「神の善を、自分のもののように考えて、自己満足する場合、あるいは、たとえそれを神の恵みによるとしても、皆と一緒に喜ぼうとせず、その恵みに他人も与かるのを嫉む場合、神に大きな不快を与えるであろう^(12.7)」が、「神における友愛」は、「自分一個のために望みを燃すことなく、兄弟たちの愛のために、お役に立ちたいと願う^(12.8)」のである。

以上考察してきたアウグスチヌスの愛の思想の特徴の全ては、「主よ、あなたの豊かな愛のうちに、あなたの真理によって養われる人々と、あなたにおいて結びつき、あなたにおいて彼らと共に喜ぼう^(12.9)」という祈りの言葉の中に、云いつくされていると思う。

最後に、ニーグレンの説く愛との関連から、アウグスチヌスの愛の特徴をふり返ってみると、彼が主張する「友と共なる生活」によって成り立つ愛には、ある意味で、ニーグレンが定義するような、アガペーの本質なる、無私的、無償的「神の下降の愛」、並びに、エロースの本質なる、所有せんとする愛を含む「神への上昇の愛」も同時に説かれている。しかし、それは決して、ニーグレンの解釈しているような、二者択一を迫るものではなく、むしろ、この下降と上昇の両者が、「愛し愛される」相互性として、何よりも重要視されているように思える。実は、彼がこゝにこそ、真の愛を見出しているのであるが、更にそれに終ることなく、その愛は、己と神との関係を最大事とする閉じられた愛としてではなく、自己の魂と友の魂との、切り離されえない密接な交わりの中に成り立つものとして、「神への愛」が深まれば深まるほど、広く開かれていく愛なのである。

このような「友と共なる生活」は、結局、友も己をも、神へと導いてゆくもの

であり、彼は、この友との交わりの究極的根源、並びに理想像を、三位一体なる神に求めていたに違いない。又、「神における友との生活」という共同体思想、これは、パウロの説く、キリストの神秘体思想に基いていたことも容易に肯ける。たとえば、第13巻の創世記の比喩的解釈の中に、「夫々のものは善いが、全てを合せたものは甚だよい、と云う。その“全てのもの”とは、御独子なる御言において、“天地”であるもの、即ち、全ての時に先立ち、朝もなく夕もなく予定されている“教会の頭と体”⁽³⁰⁾である、」と解されている。これは、コロサイ書〔Ⅱ、17-18〕、エフェゾ書〔Ⅰ、22-23〕に見られる、「キリストは教会の頭であり、教会は彼の体である」という、パウロの神秘体思想から取られていることは明らかである。

さて、アウグスチヌスの友愛思想を『告白』だけに範囲を限定し、しかも、「友と共なる生活」という一側面を、表面的に捉えたにすぎないこの考察には、種々の問題点も出てくると思う。たとえば、前述してきた彼の生涯にみられる友との交わりを、「神における友愛」へとつながる愛であると、一様に云ってよいのか、又、友となる生活を、全て真理探究に結びつけてよいものか、等々。ただ、少なくとも云えることは、たしかに彼自らも、若い頃に見られた友情を、*caritas*なる愛とは、およそかけ離れた、*cupiditas*なる情欲の愛として区別している。にも拘らず、彼がこう云った愛について語る時も、やはり、*amare, diligere*という言葉を、等しく用いているところから、彼はむしろ何か、*caritas*とか、*cupiditas*とか云われる愛をもう一つ掘り下げた基盤、いわゆる、人間にみられる根本的事実としての愛を、云わんとしているのではなからうか。この*amor*が、神によって人間の心の中に蒔かれ、成長し開花して、はじめて「神における愛」(*caritas*)となるのであって、この根源的*amor*なくして、*caritas*なる愛もないことになる。たゞし、これを不純なる愛*cupiditas*が、段々と純化され、浄められて、段階的に上昇し、*caritas*なる愛にまで至ると解すれば、それこそ、*cupiditas*と*caritas*との区別は曖昧となり、ニーグレンが指摘したように、結局は、*cupiditas*でさえ、つまるところは神への愛であるという、矛盾した結果とならう。ところが、アウグスチヌスの愛の特徴は、この根源的*amor*自体が、神から先ず与えられた「恵み」であるということとあり、しかるに、

それが神に向けられずに、神から離れ非存在へと向う場合、*caritas* とは全く反対の愛、*cupiditas* となるということで、これは「主よ、わが愛するものを与え給え。実際、私は愛している、しかし、この愛を下さったのは御身である⁽³¹⁾」という言葉からも伺われる。更に、もう一つの特徴は、この *caritas* は、聖霊によってはじめて成り立つこと、即ち、*cupiditas* によって落ち込んだ淵から、その魂を引き上げて下さる聖霊の働きによると、いうことである。

こういった点を、より明確にするために、「友と共なる生活」というアウグスティヌスの考え方を、より深く究め、彼がいかにして、三位一体の神の愛や、キリストの神秘体思想からそれを汲みとり、且つそこへ至ったかを、みてゆくことが大切だと思う。

(1) Conf. lib. X, c.20, n.29; c.21, n.31

(2) 初期の著作『ソリロキア』においては、根本的事実としての愛が、神と魂とを知る *desideratio* をたきつけるものとして、主張されている。即ち、「神よ、愛することのできる全ては、あなたを、意識的にか無意識的に愛している……私は、神も魂も知らないが、愛していることは確かである、云々。」尚、この魂というのは、友の魂のことも含まれている。

(3) Conf. lib. I, c.19, n.30

(4) " II, c.08, n.16

(5) " XIII, c.07, n.08

(6) " IV, c.01, n.01

(7) " IV, c.04, n.07

(8) " IV, c.04, n.09

(9) " IV, c.07, n.12

(10) " IV, c.08, n.13

(11) " II, c.05, n.10

(12) " V, c.07, n.12

(13) " V, c.08, n.14; c.13, n.23

(14) " V, c.10, n.18

- (15) Conf. lib. V , c.13, n.23
(16) " VI , c.02, n.02
(17) " VI , c.14, n.24
(18) " IX , c.09, n.22
(19) " IX , c.12, n.30
(20) " VI , c.06, n.09
(21) " VI , c.10, n.17
(22) " X , c.04, n.05
(23) " IV , c.04, n.07
(24) " VIII , c.04, n.09
(25) " IV , c.09, n.14
(26) " XII , c.25, n.34
(27) " X , c.39, n.64
(28) " XI , c.02, n.03
(29) " XII , c.23, n.32
(30) " XIII , c.34, n.49
(31) " XI , c.02, n.03